市響

平成30年市川市芸術祭

第401回　交響楽の午後
市響65周年

MAHLER: SYMFONIE NR. 9
TRISTAN UND ISOLDE

2018.7.8(日)

午後2時開演(1時30分開場)

市川市文化会館大ホール
(JR総武線・本八幡駅下車)

入場無料 〈この演奏会は未就学児のご入場ができません。〉

指揮：大勝秀也
管弦楽：市川交響楽団

お問い合わせ：TEL.047-339-3554市川交響楽団協会（篠田）　市響ホームページ：http://ichikyo.org/
主催：市川交響楽団協会　共催：市川市　協力：山崎製パン株式会社　（公財）市川市文化振興財団　後援：千葉交響楽団協会

本日のプログラム

ワーグナー/楽劇「トリスタンとイゾルデ」より 前奏曲と愛の死（市響版）（25分）

ソプラノ:知念利津子　イングリッシュホルン:安里昌悟

♬ 休憩（20分）

マーラー/交響曲第 9 番　（85分）

第 1 楽章 Andante comodo

第 2 楽章 Im Tempo eines gemächlichen Ländlers. Etwas täppisch und sehr derb

第 3 楽章 Rondo, burleske, allegro assai, sehr trotzig

第 4 楽章 Adagio. Sehr langsam und noch zurückhaltend

プロフィール

ソプラノ／知念利津子（ちねん・りつこ）

沖縄県立芸術大学声楽専攻卒業、同大学院修了。第10回おきでんシュガーホール新人演奏会オーディショングランプリ受賞。沖縄県国際交流人材育成財団海外留学奨学生としてドイツ留学。財団からの研修修了後、イタリア・ボローニャへ留学。帰国後、ヴェルディ・モーツァルト・フォーレ作曲《レクイエム》、《交響曲第9番》ソプラノ ソロを務める。また、團伊玖磨「紀州路」、「木曽路」な どの邦人作品演奏なども積極的に行う。 舞台においては、オペレッタ《こうもり》ロザリンデ、《コジ・ファン・トゥッテ》フィオルディリージ、《修道女アンジェリカ》タイトルロール、《魔笛》侍女 1役を演じる他、F.トルシエ氏のフランス国家勲章授 与式にて演奏。（於:フランス大使公邸）文化庁芸術団体人材育成支援事業ガブリエッラ・トゥッチマスタークラス参加。沖縄県本土復帰40周年記念式典にて国歌演奏。2016年「知念利津子ソプラノリサイタル」を開催。声楽を外間三枝子、澤田文彦、UweHeilmann、M.F.Cavazza、C.Giardini、F.cordeiro-Opa、高丈二の各氏に師事。

日本演奏連盟会員

©西岡教清

指揮／大勝秀也（おおかつ・しゅうや）

東京に生まれる。東京音大卒業後1988年ドイツに渡り、ボン市立歌劇場のアシスタントとして多くのオペラを指揮。91年ゲルゼンキルヒェン市立歌劇場第一指揮者、94／95シーズンよりボン市立歌劇場第一指揮者。ドイツを中心にヨーロッパで活躍し、96年5月／6月ボン歌劇場海外公演を行なった。

オペラ以外には、ボン・ベートーヴェン・ハレ管、北西ドイツ・フィル、ザグレブ・フィル等と協演。シュトウットガルト室内オーケストラとはCD録音を行ない、95年3月／4月にアメリカ、オーストラリア演奏旅行を行なった。

96年７月よりマルメ歌劇場音楽監督に就任。99年5月には同歌劇場管弦楽団とCDをリリースし、スペイン演奏旅行を行なった。

国内では、N響、新日フィル、二期会，日生劇場の「日本人オペラシリーズ」、関西二期会などで公演。正統ドイツの薫り豊かな演奏が高く評価されている。

06年6月／07年5月ボリショイ劇場で「トスカ」を指揮し好評を博した。2011年12月に金沢と高岡で、2012年1月には東京の新国立劇場で、泉鏡花原作、池辺晋一郎作曲の「高野聖」を初演し好評を博した。2012年10月大阪でフェラーリ作曲のオペラ「イル・カンピエッロ」を上演、2013年12月いずみホールで演奏会形式により、モーツァルト「イドメネオ」を指揮。

びわ湖ホールでは、2014年2月に「ホフマン物語」、2014年12月には「天国と地獄」を上演、2015年12月にはドヴォルザーク「ルサルカ」の上演し、好評を博した。また、平成29年度全国共同プロジェクト〈トスカ〉公演を新潟、新川（富山県）沖縄で行った。

現在、昭和音楽大学非常勤講師。ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団正指揮者。

管弦楽：市川交響楽団（いちかわこうきょうがくだん）

2016年に創立65周年を迎えたアマチュアとしては全国有数の伝統を持つオーケストラ。メンバーは現在100余名で年齢構成は高校生から70代までの幅広い層にわたり、職業も会社員、教員、主婦など多彩。地元市川市での演奏会を中心に全国各地での文化行事やオーケストラ・フェスティバル等にもしばしば招かれ演奏を披露している。著名な音楽家との共演も数多く経験しているほか、特に地元ゆかりの音楽家との共演にも力を注ぎ、地域の音楽芸術の振興に多大な貢献をしている。市川交響楽団は市川混声合唱団、市川交響吹奏楽団、行徳混声合唱団、市響ジュニアオーケストラの各団体とで構成する市川交響楽団協会の中核として“クラシック音楽をより多くの市民に楽しんでもらおう”をモットーに常に積極的な活動を展開している。

本日の出演者

【コンサートミストレス】
立田祥子

【第1ヴァイオリン】
石崎俊信
大橋一郎
皆合愛子
菅原夕
佐分利幸江
萩原詩織
秦一宜
早川貴子
堀都与子
山本芳功
渡辺綱介
渡辺惟

【第2ヴァイオリン】
岩田徳子
大橋かおる
金田みどり
佐藤薫
滝澤葉子
富田八江子
中島雪香
中野さゆり
服部恵子
久田しげ子
細貝春
溝田範子
武藤敦子

【ヴィオラ】
石本恵理
上田佳津子
内田綾美
河野真士
鈴木亜矢子
園田陽子
谷口善樹
奈良林弘子
葉山里香
星乗昭
星光
本郷尚子

【チェロ】
岩田啓子
倉澤倫子
後藤庸一
小松高明
中村公一
中元悦治
日澤優
福原耕二

【コントラバス】
池田和正
石橋俊一
神代順子
上山優子
河本治彦
小林真弓
高間友明
番場仙嘉
村上信乃

【フルート・ピッコロ】
木村眞諭紀
佐藤絵里
佐藤洋行
番場ますみ
二木陽子

【オーボエ・イングリッシュホルン】
白木広美
二村直子
古澤恵子
本間広樹

【クラリネット・バスクラリネット】
秋永直美
井垣貴嗣
時田雄
半藤嗣人
八木良子

【ファゴット・コントラファゴット】
井垣葉子
遠藤由紀子
金坂哲
山内静

【ホルン】
井村公子
木下泰斗
近藤利昭
嶋村恒夫
武井綾香
鳥山雅史
林田朋子
山内正晴

【トランペット】
関良馬
十川雅彦
田崎真二

【トロンボーン】
石黒弘道
藤平一仁
吉川昌憲

【チューバ】
渡邉鉄雅

【打楽器】
大澤香奈
佐藤美穂子
都筑裕
時田裕
和田英恵

【ハープ】
高野麗音

マエストロ・山本祐ノ介の
「オーケストラがやってきた」
交響曲を聞こう ベートーヴェン / 交響曲第５番「運命」
カスタネットとオーケストラの競演 ゲスト：真貝裕司（元札幌交響楽団打楽器奏者）
山本直純作品集

2018.12.09（日）14時開演
〈入場無料〉 会場：市川市文化会館大ホール

かんばら ひとし

ワーグナー/楽劇「トリスタンとイゾルデ」より 前奏曲と愛の死（市響版）

ドイツの作曲家ワーグナーは、従来のアリアをつないだ歌劇とは異なった、音楽劇（楽劇）を創始しました。それは一幕ないし一場を通じて途切れることなく続く〈無限旋律〉と、それぞれに意味をもつライトモティーフといった独自性あふれるものです。この「トリスタンとイゾルデ」は上演時間が約4時間にも及ぶ音楽劇です。チューリヒの絹織物商オットー・ヴェーゼンドンクの妻マティルデとの不倫をきっかけに書かれた、作曲者の体験と思想を音楽の中に封じ込めた自伝的な作品と言われています。

*

イゾルデは傷を癒やすことができるアイルランドの女王。トリスタンはアイルランドの属国コンウォール国の勇士です。イゾルデの婚約者を一騎打ちで殺し、そのとき自らも深傷を負ったトリスタンは、そのことを隠してイゾルデの手当を受けます。その正体を見破ったイゾルデは婚約者の仇をとることを考えますが、トリスタンのまなざしに恋をし、傷の回復とともに二人は引かれ合うようになります。

不倫関係のあったヴェーゼンドンク夫人

ところがその時、コンウォール国王は妃を失って久しく、イゾルデを王妃にめとる事を決めてしまいます。トリスタンはイゾルデを恋する想いを振り切り、君主への忠誠を選ぶこととし、国王とともにイゾルデをアイルランドへ迎えに向かいます。舞台はその帰路から始まります。

〈前奏曲〉は、チェロが奏でるトリスタンの動機と、木管楽器によるイゾルデの動機から始まります。木管が入る瞬間のハーモニーは「トリスタン和音」と呼ばれる和音です。これまでのハーモニーの持つ解決に向かうという動的機能ではなく、その瞬間の純粋な響きを目的としたこの和音は、ドビュッシーやこのコンサートの後半で演奏されるマーラーにも多大な影響を与えたました。

コンウォール国に向かう船の中でイゾルデは、愛しているにもかかわらず自分を花嫁として君主に差し出すトリスタンをののしります。イゾルデの怒りはとどまらず、侍女が王を愛するためにと用意した惚れ薬を渡すと「その時になったら自分は自ら毒薬を飲む」と言い放ちます。

陸が近づくとさらにイゾルデは、トリスタンが自分の婚約者を殺しの因縁を蒸し返し、その償いに毒入りワインを飲むよう要求します。腹を決めたトリスタンが杯を半分まで飲むと、イゾルデはそれを奪い取り残りを飲み干します。皮肉なことに、そこに入っていたのは毒薬でなく惚れ薬でした。そして二人は互いに激しく愛し合うようになります。

第二幕の最後で、友人にイゾルデとの密会の場を密告されたトリスタンは、その友人と決闘しますが、戦いの最中、相手の剣にわが身を投げ出して深手を負います。

続く第三幕の冒頭、ブルターニュ城に連れ戻されたトリスタンは、死にゆくわが体を感じながらイゾルデの船を待ちます。この傷を癒やすのはイゾルデしかいないのです。荒涼とした海を表す**〈嘆きの調べ〉**と呼ばれるイングリッシュホルンで幕が開きます。

しかしトリスタンはイゾルデの到着とともに息絶えてしまいます。イゾルデは惚れ薬に翻弄された禁断の**〈愛の死〉**を歌いあげます。前奏曲の「トリスタン和音」で解決を見せることのなかったハーモニーはこの世とあの世の間を行き来するがごとく転調を繰り返し、宇宙と一体となります。最後の言葉は、「溺れ、 沈み… 我を忘れ… この上なき歓び！」。イゾルデは息絶え、ハーモニーも主和音に解決します。

2番目の妻コジマとワーグナー

愛の死　訳詞

穏やかで静かに微笑
彼が目をやさしく　開く様が
見えている? 見えない?
次第に明るく 輝きを増し、
星たちに照らされて 空を昇っていくのを・・・

見えない?
彼の心臓が 雄々しく、
気高く 胸の中で盛り上がるのを
その唇から 幸せそうで穏やかで
甘い吐息は 静かにこぼれるのを

友よ! 見て!
感じないの？　見えないの?
聞いているのは 私だけ?
こんなにも美しく 静かで、
悲しげに、すべてを語り、
そこから おだやかに調和し、
私に迫り、私を揺さぶり、
優雅に こだまし、
私の周りに響くのを

明るく響きながら、
私の周りに
それは穏やかな風なの?
甘い香りの雲なの?
うねるように、私を取り囲み
私は吸い込み、耳を澄まし
すすり、沈んでいくのでしょうか
それとも甘い香りの中で、消えていくのですか?

このうねる様な 怒濤の中で、
この鳴り渡る 響きの中で、
世界の息吹の中で、
全てを 吹き飛ばす
溺れ、 沈み… 我を忘れ…

この上なき歓び!

マーラー/交響曲第９番

「自分はこの人生の中で何を残すか？」マーラーの交響曲第9番はこの質問を投げかけながら、干支が一回りした私の心の中に響きます。私が10年前だったらそうは感じなかったかもしれません。マーラーは今の私の年齢の10歳前にこの曲を書き上げています。交響曲第9番はマーラーが完成させた最後の交響曲です。

マーラーは交響曲第9番のジンクスをとても気にしていたと言われています。実際に「交響曲第9番」の作曲と前後して死去した著名な作曲家は、番号付けの解釈は様々あれ、ベートーヴェン、シューベルト、ブルックナーなどがいます。

いずれにしてもマーラーほど死を多くの交響曲の中に刻印した作曲家を私は知りません。マーラーはなぜそんなに死に対して神経質だったのでしょうか？

＊

マーラー（1909）

交響曲第9番の作曲当時にマーラーを診断した精神分析医ジークムント・フロイトは、それが幼児体験によるものであるとしています。

生地ボヘミヤでの幼児死亡率が50％の当時、グスタフ・マーラーはガラス窓もない貧しい家で、つぎつぎと生まれては2歳の誕生日を迎えらない弟妹たちの死に直面します。並外れた金銭欲と出世欲の持ち主の父、こんどこそは丈夫にと自らの健康を顧みることなく子どもの世話に追われ、夫の抑制の効かない激情に必死で耐える母。グスタフの日常の苦しい出来事からの逃避は辻音楽師の手回しオルガンだったといいます。

マーラーが音楽を本格的に学ぶきっかけは、野心あふれる父がブルジョア階級の必需品としての音楽の重要性を知ったことです。父はアコーディオンとその個人レッスンを与えます。グスタフは地元の民謡、ダンス音楽、練兵対のラッパ、行進曲を栄養にめきめき音楽の力をつけていきます。

10歳ではピアノの神童と呼ばれ、16歳でウィーン楽友協会音楽院のピアノ科に入学し忍耐の優等生となったマーラーも、神のごとく尊敬するワーグナーに初めて会ったときは、指1本動かすことができず、ただ立ちつくすだけだったといいます。当時の音楽院では、革新的すぎてワーグナー礼賛がタブーだった中、ワーグナーの信奉者で和声学を教えるブルックナーとの出会いはマーラーの音楽に大きな影響を与えます。マーラー自身、ブルックナーの弟子であることを自らも認めています。

ブルックナーの交響曲第3番の初演時、嘲笑を残しつぎつぎと聴衆が帰る中、最後まで残ったのはマーラーを含むたった7人だったといいます。意気消沈したブルックナーが改作をはじめるとマーラーは、「まったくその必要はない」と強く言い、出版に際し自らピアノ連弾による編曲を受け持ちました。マーラーの交響曲に対する思いはこの師弟関係から生まれたのかもしれません。

ブルックナー同様、作曲ではなかなか認めてもらえなかったマーラーが生活のために選んだのは、ヤル気のない楽員の吹きだまりとなった田舎のカペルマイスタ（楽長）でした。「手に負えない若造」といわれながら、作曲する時間を捨てててもマーラーは働きます。彼がかかわったほとんどの劇場の財政は改善され、マーラーが指揮する「ドン・ジョバンニ」はブラームスにも認められます。

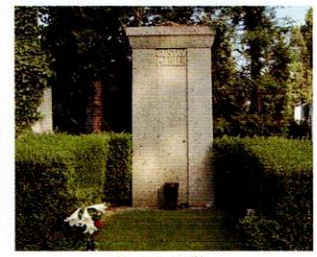
劇場の仕事を始めて8年後、マーラーはついに自作の交響曲を発表する機会を得ます。新聞の批評は「交響曲の伝統的な法則と秩序に反するもので、ひとつの犯罪である」と惨憺たるもので、「最終楽章が始まったとき、会場にいた婦人は驚いて手にしていたものを全部床に落としてしまった」と記録に残っています。

「やがて私の時代がくるであろう」マーラーは言いました。

悲哀、歓喜、絶望、死への恐怖、自己存在価値、依存、自立、愛。交響曲第9番を聞くと、マーラーはわれわれ人類がもつさまざまな激情を描くために、それぞれが長大ですべてに関係性が高い交響曲群を残したのだと気づかされます。

＊

マーラーは死への恐怖からか交響曲第8番の完成後、次の交響曲をあえて『大地の歌』と名づけたといわれています。そしてつぎのこの交響曲を書き終えたとき「やれやれ、これで危険は去ったというわけだ！」と言ったそうです。安心してその作品に「交響曲第9番」という曲名をつけた後、マーラーは自らの耳でこの曲を聞くことなくこの世を去ります。そして続く交響曲は未完に終わりました。


マーラーの墓

＊

曲はゆっくり－速い－速い－ゆっくりの4楽章形式です。

第1楽章　ニ長調　4/4拍子　アンダンテ・コモド

カオスで短かなイントロを持つこの楽章は2つの主題が互いに結び付き合い、有機的に絡み合い、次第に1つの大きなうねりをつくってきます。

第2楽章　ハ長調　3/4拍子　おだやかなレントラー風のテンポで。いくぶん歩くように、そして、きわめて粗野に

テンポの異なる3つの舞曲が、ABCBCABAと不規則に並ぶ楽章です。

A：マーラーらしいどこか不吉な空気のある民族的な舞曲。

B：活き活きとしたワルツ風舞曲。

C：ゆっくりとしたレントラー舞曲。

第3楽章　イ短調　2/2拍子　ロンド～ブルレスケ。アレグロ・アッサイ。きわめて反抗的に

ブルレスケとはユーモアと皮肉を兼ね備えた道化師のようにおどけた曲想をいいます。曲は3つの部分でできていて、ABABCAというロンド形式のスケルツォです。

第4楽章　アダージョ　変ニ長調　4/4拍子　きわめてゆっくりと、さらに控えめに

祭壇にひざまずく自分が見えるような曲です。ABABA＋コーダ形式で、音楽は次第に大きな流れとなり、心に染みいっていきます。中間部や終結部では冷酷なほどの感情抑制の中、それはもはやマーラーの言葉ではなく神がマーラーを使って問いかけさせているように私の心の中に響きます。「あなたはこの人生の中で何を残すか？」と。